令和5年度　特選コース

第1回　入学試験問題　（2月1日　午前）

国　語　（50分）

注　意

1　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
2　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
3　答えはすべて解答用紙に記入すること。
4　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
5　印刷がわからない場合は申し出ること。
6　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	

一

次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、旅行先で土産を買う。
2、山の頂上から見る景色。
3、努力が徒労に終わる。
4、類似の品物に注意する。
5、ピアノの音色が快い。
6、問題をカイケツする。
7、悪事にカタンする。
8、メイカクな答えを出す。
9、人の言うことをスナオに聞く。
10、職業にツく。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学五年生の少年は、一人でバスに乗り、入院中の母を見舞っている。父から渡された一冊十一枚つづりの回数券を二冊使い切ってしまい、さらに三冊買うことになった。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすぼまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスッとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と［A］をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつっかえてるだろ」とぶっきらぼうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちょっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの？」と、さっきよりさらにぶっきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかっている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かぼそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西

の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

買い足した回数券の三冊目が――もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を――今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、①泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っているときも、必死に唇を噛(か)んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空(す)いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、［B］にじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛(まぎ)らせて、うめき声を漏(も)らしながら泣きじゃくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。②こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」――［C］ではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながら③かぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい――とは、言われなかった。

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうっと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

④河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」――声はまた、ぶっきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか、「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親は［ D ］した顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？　ありがとう」と笑って許してくれた。

「帰り、ひょっとしたら、⑤ちょっと遅くなるかもしれないけど、いい？　いいでしょ？　ね、いいでしょ？」

両手で拝んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司とるからな、パーティーだぞ」と笑った。

バス停に立って、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ごして、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃――やっと河野さんのバスが来た。間違いない。運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。通路を歩くのはバスが停まってから。整

理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町一丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。

バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちょっと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる。

だから、⑥少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとうございました」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

バスが走り去ったあと、空を見上げた。西のほうに陽が残っていた。どこかから聞こえる「ごはんできたよお」のお母さんの声に応えるように、少年は歩きだす。

何歩か進んで振り向くと、車内灯の明かりがついたバスが通りの先に小さく見えた。やがてバスは交差点をゆっくりと曲がって、消えた。

（重松 清「バスに乗って」より）

問　一、[A]にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、口　　イ、目　　ウ、顔　　エ、頭

問　二、――線①「泣きだしそうになってしまった」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中からそれぞれ指定された字数で探し、1は最初と最後の三字を抜き出して答え、2はそのまま抜き出して答えなさい。

少年は、[1、三十一字]と思っており、[2、九字]を使いたくなかったから。

問三、[B]・[D]にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、ゆらゆらと　イ、じわじわと　ウ、はらはらと　エ、ほっと　オ、きょとんと　カ、どきりと

問四、――線②「こんなひと」とありますが、「少年」は「河野さん」をどのような「ひと」だととらえていましたか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、いつも自分を叱りつけ、自分に劣等感を抱かせるようなひと。
イ、いつも自分の行動を否定し、自分のことを見下しているようなひと。
ウ、いつも客に対して無関心に見え、自分のことなど眼中にないようなひと。
エ、いつも機嫌が悪そうに見え、自分に恐怖心を抱かせるようなひと。

問五、[C]にあてはまる言葉を文章中から六字で探し、抜き出して答えなさい。

問六、――線③「かぶりを振って」とありますが、このときの「少年」はどのようなことを伝えようとしていましたか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、財布を落としたのではないということ。
イ、財布を落としてしまったということ。
ウ、財布を持ってきていないということ。
エ、財布を持ってきたはずだということ。

問七、――線④「河野さんはなにも言わなかった」・⑥「少年はなにも言わない」とありますが、この部分について四人の生徒が意見を出し合いました。次の会話を読んで最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア、Aさん――「河野さん」が「なにも言わなかった」のは、「少年」がかわいそうだと思ったからだと思うし、「少年」が「なにも言わない」のは、単に恥ずかしかったからだと思うよ。

イ、Bさん――そうかなあ。「河野さん」は仕事中だったから警察を呼ぶのは良くないと考えたんだと思うし、「少年」が「なにも言わない」のは、早くバスを降りなきゃいけないと焦(あせ)っていたからだと思うよ。

ウ、Cさん――私は、「河野さん」が「少年」の言葉から「少年」の個人的な事情を汲(く)み取ったから「なにも言わなかった」んだと思うし、「少年」が「なにも言わない」のも「河野さん」が仕事中だということをよく理解していたからだと思うよ。

エ、Dさん――僕は「河野さん」が「なにも言わなかった」のは、職務遂行(すいこう)に対する義務感がとても強かったからだと思うし、「少年」が「なにも言わない」のは、「なにも言わ」なくても「少年」の考えが「河野さん」にはわかると思ったからだと思うよ。

問八、――線⑤「ちょっと遅くなるかもしれない」と「少年」が言ったのはなぜですか。その理由を文章中の内容を踏まえて、三十字以上四十字以内で答えなさい。

問題は次ページに続きます。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

たとえば、大学生が企業に就職するために、希望する企業やその業界の評判、成長率などを調べようとする時、関連する記事を信頼性の高いメディアから選び、多く読み込まなければなりません。通り一遍の情報では、ライバルに勝てないでしょうし、運良く就職できたとしても、業界自体が斜陽(注1)になってしまっては、元も子もないのです。

人生で何か大事なことを考えたり、決定したりする前には、必ず①こうした作業が発生します。まず情報を集め、取捨選択するのです。適切な武器を装備しなければ戦場で勝てないように、私たちは熟練の戦士のように武器を見抜き、選ぶ力が必要です。ネットリテラシーやメディアリテラシーという言葉をよく聞きますが、大部分はこのスキル(注2)のことだと考えて良いでしょう。

ところが、私たちには弱点があります。「②確証バイアス」と呼ばれるものです。もともとは認知心理学や社会心理学の言葉で、自分の持つ仮説や心理的情況を検証する際、その仮説を支持、肯定する情報ばかりを信じてしまうことを意味します。

この「確証バイアス」は曲者で、ついニュースでも自分に都合の良い、耳触りの良いものばかり見てしまいがちです。（中略）

実は、確証バイアスをさらに加速させる装置がインターネットにはあります。それが、「フィルターバブル」です。

この言葉を生み出したのは、アメリカの活動家、イーライ・パリサーさんです。彼が二〇一一年に著した『閉じこもるインターネット』によると、ある時、Facebook(注3)の自分のページから保守系の友人が消えていることに気づいたそうです。彼は保守系の人たちとは政治的な立場が違いますが、保守系の人たちの考えも知りたいと思い、わざわざ友人として登録していました。

「しかし、彼らのリンクがわたしのニュースフィードに表示されることはなかった」とパリサーさんは書いています。なぜなのでしょう？

ネットの進化してきた方向の一つが、ユーザーへの最適化でした。当たり前ですが、私たち一人一人の好みや考え方は違います。自分の見たいと思う情報や欲しいと思う商品があるｗｅｂサイトが「良いサイト」であり、当然のことながら多くのユーザー、つまりお客さんが集まってきます。

ですから、ｗｅｂサイトはそれぞれ異なるユーザーが見たいと思う情報をユーザーに合わせて提示するようになります。これが、「③パーソナライズ」です。たとえば、街の大きな書店で本を買うのと、Amazon(注4)で本を買うのとでは、同じような行為に見えて、全く異なります。大きな書店では書店のルールや判断によって本が集められ、本棚に並んでいますが、Amazon の画面でさし出される本は私が今まで Amazon で購入した本の履歴を参考に、Amazon が勧める本です。

このようにパーソナライズされたネット書店では、「私が読みたい本」はどんどん見つかるかもしれませんが、実は今まで知らなかった本や好み

ではないと思っていた本、「私が知らない本」との出会いを失っている危険性もあるのです。

しかし、パーソナライズはあらゆる大きなｗｅｂサイトに採用されています。その最たる例がGoogle(注5)やFacebookです。話を戻すと、パリサーさんのFacebook上から保守系の友人たちが消えたのは、彼が保守系の友人がシェアしてきた情報をクリックするよりも、自分に近い考えの友人がシェアしてきた情報をクリックすることが多かったことを、Facebookが把握しているからだろうと推察します。

ほとんどの人が気づかないうちに、情報の取捨選択を勝手にされてしまっているというわけです。これを、パリサーさんは「フィルターバブル」と名付けました。今やネットではパーソナライズされたフィルターが仕掛けられ、私たちはバブル（泡）に包まれているかのように、自分が見たいと思う情報だけに囲まれた「情報宇宙」に包まれることになる、と指摘します。

ネットで何か検索したり、ニュースを読んだりするだけでも、私たちの周りにはそれぞれ目に見えないフィルターバブルがあるのだと、まず知ることがとても大事なのです。

インターネットは私たちが知らないうちに、情報を取捨選択している。そんな「フィルターバブル」のお話をしました。［A］、私たちは今、「自分が欲しいと思う情報」「自分が興味ありそうな情報」を容易に、ＰＣだったらクリックひとつ、スマホだったらタップひとつで、無料で入手できます。

この「無料で」ということを、私たちはあまり意識したことがありません。［B］、④うまい話にはだいたい「裏」があるものです。一体、なぜ私たちは日々、膨大なニュースや情報を「無料で」手に入れることができるのでしょうか？

答えは、それほど難しくはありません。ネットよりも歴史があり、基本的には無料のメディアである民間のラジオやテレビを見ればすぐに気づきます。そう広告です。

［C］、私たちの生活には広告があふれています。テレビ、新聞、雑誌、ラジオという四大マスメディアと呼ばれるものの中だけではありません。電車の車内吊り広告、バスの車体に描かれた広告、映画館で本編上映前に流れる広告、ビルの屋上に掲げられた広告、ポストに入り込むチラシの広告、あちこちから届くダイレクトメールの広告……と広告を見ない日はないと言ってもよいぐらい、ありふれたものです。

そして近年、広告はインターネット空間にも進出し、進化していきました。従来、最も広告でお金がかけられていたのは、四大マスメディアでした。現在でも日本の総広告費の約四割を占めています。では、残りはどのようなメディアかといえば、二〇一〇年代に入ってからインターネットが伸び続け、今や四分の一にまで迫ろうとしています。

（中略）

私たちは色々なサイトに広告が貼られていると知っています。まったく興味のない商品の広告、あるいは、ちょっと前に自分が検索した商品やサービス（子ども服だったり、ホテルの予約だったり）が色々なサイトに出現して、まるで私の行動が誰かに筒抜けになってしまったような広告

のこともあります。

⑤前者は「予約型広告」と呼ばれ、従来のマスメディアと同じように、その枠に広告が常に「貼られている」もので、そのサイトを訪れた人たち全員が同じ広告を見ます。

後者は今、増えている「運用型広告」と呼ばれるものです。二〇一〇年代初め、これらの広告の割合は拮抗(注6)していましたが、今やこちらが主流になりつつあります。

「運用型広告」とは、ユーザーが興味を持っているジャンルや店舗、商品の広告をリアルタイムに表示していくことで、より購買を促進することができると期待されています。ここで、大きな役割を担うのが「ターゲティング」という技術です。大手サイトであれば、どこでも利用しています。

（中略）

ネットで配信される記事や情報は巨大(注7)プラットフォーム上でパーソナライズされ、表示される広告もターゲティングされ、ネット空間は私たちにとって、ますます居心地のよいものに作られているのです。

しかし、果たしてこれは「いい話」なのでしょうか。このフィルターバブルの弊害は、私たちの社会にとってとても深刻なものになりつつあります。

「無料で」ニュースや情報を入手できる代わりに、私たちは広告を見せられるだけでなく、自身のプライバシーや情報環境をオンラインで見知らぬ誰かに引き渡しているのです。

荒唐無稽に聞こえるかもしれませんが、平和な社会であれば問題なくても、一度、緊張感を孕んだ時にはそうしたデータが誰にどのように使われるのか。私たちはよくよく考えなければいけないのです。

（猪谷 千香「その情報はどこから？」より）

（注1）「斜陽」……新しい勢力に圧倒されて、しだいに没落していくこと。
（注2）「スキル」……訓練や学習によって獲得した能力。
（注3）「Facebook」……現実世界での知人同士がネット上でも交流できるサービス。
（注4）「Amazon」……世界最大級のオンラインショッピングサイト。
（注5）「Google」……インターネットの代表的な検索エンジンの一つ。またそのサービスを提供・運営するアメリカの企業。
（注6）「拮抗」……力・勢力がほぼ等しく、互いに張り合うこと。

（注7）「プラットフォーム」……システムやサービスの土台となる環境。

問　一、――線①「こうした作業」とありますが、それはどのようなことですか。「～こと。」に続くように文章中から十二字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問　二、――線②「確証バイアス」とありますが、具体的にはどのようなことですか。次の説明が正しい場合は1、そうでない場合は2として、それぞれ番号で答えなさい。

ア、就職を希望する企業に関する記事を信頼性の高いメディアから選び、多く読むこと。
イ、自分が欲しいと思う情報や興味ありそうな情報を、容易に選んで入手すること。
ウ、書店のルールや判断によって集められた本の中から、自分で本を選んで買うこと。
エ、政治的な立場が違う人の考えも知りたいと思い、友人として登録すること。
オ、自分に近い考えの友人がシェアしてきた情報を選び、クリックして読むこと。

問　三、――線③「パーソナライズ」とありますが、これを言い換えた言葉を文章中から十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問　四、［A］～［C］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、そもそも　イ、しかし　ウ、むしろ　エ、確かに

問　五、――線④「うまい話にはだいたい『裏』があるものです」とありますが、この場合の「裏」とは具体的にどのようなことですか。文章中の言葉を使って、四十字以上五十字以内で答えなさい。

問　六、――線⑤「前者」とは何を指し示していますか。指し示す内容を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問　七、この文章で述べられている内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自らインターネット上で友人として登録した人であれば、こちらから求めていなくても自動的に情報が届くようになっているので便利だ。

イ、インターネットで検索する際に表示される悪質な広告に惑わされないよう、個人情報はフィルターバブルによって守られているので安心だ。

ウ、インターネット上で目にする情報はすでに取捨選択されているため触れやすく居心地がよくなっているが、危険性も孕んでいるので注意すべきだ。

エ、広告がインターネット空間に進出したことによって商品の検索がしやすくなり、消費者にとっても都合のよい面が増えているので注目すべきだ。

問題は次ページに続きます。

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。1～6は形式段落を示します。

1　標準語で「寒い」というよりも、それぞれの①お国言葉を口にするほうが寒さが身に迫ってくる。そう感じるのは筆者だけだろうか。東北では広く「しばれる」が言われ、秋田には「さんび」の言葉がある。新潟は「さーめ」である。

2　この冬いちばんの寒気が日本列島を覆(おお)っている。いつもより早めのドカ雪に、早めの雪下ろし。秋田や新潟などから届くニュースに、映像では分からないであろう苦労を思う。

3　江戸時代、□を全く知らぬ人々に実情を伝えようとしたのが越後(えちご)(注1)の文人鈴木牧之(ぼくし)であり、世に送った書物が『北越雪譜(ほくえつせっぷ)』である。構想から40年にして江戸で出版にこぎつけるまでの経緯が、近刊『雪国を江戸で読む』（森山武著）にある。

4　支援を頼った著名文人が次々と亡くなるなど不運が重なった。出版が決まってからも苦労はあり、方言がわかりにくいと注文がついた。労作を開くと、地元言葉が丁寧(ていねい)にちりばめられている。例えば雪は払うというような生易(なまやさ)しいものではなく「雪掘(ゆきほり)」という。

5　その雪を空き地に積み上げるのが「掘揚(ほりあげ)」だと知れば、降雪の多さを感じる。かんじき(注2)をはいて雪中を歩くのは「雪を漕(こぐ)」。実感のこもった筆致は江戸の人々の関心を引いたようで、②よく売れた。③各地の気象に思いをはせるのは、今も昔も変わらない。

6　〈朝戸繰りどこも見ず唯(ただ)冬を見し〉原石鼎(せきてい)(注3)。雪国でなくても、朝起きて雨戸を開ける瞬間、④少し覚悟がいるようになった。きょうも冬型の気圧配置が続くという。どうかご自愛を。

（朝日新聞「天声人語」より）

（注1）「越後」　……現在の新潟県の旧国名。佐渡を除く全域にあたる。
（注2）「かんじき」　……雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように靴(くつ)などの下につけるもの。
（注3）「原石鼎」　……島根県出身の俳人。

問　一、――線①「お国言葉」とありますが、これと同じ意味を表している言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問　二、□にあてはまる言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問　三、――線②「よく売れた」とありますが、何が「売れた」のですか。文章中から五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問　四、――線③「各地の気象に思いをはせる」とありますが、筆者がこの文章を書いている時点で実際に雪国の「気象に思いをはせ」ていることが分かるのはどの部分ですか。該当（がいとう）する一文を探し、最初の三字を抜き出して答えなさい。

問　五、――線④「少し覚悟がいるようになった」とありますが、それはなぜですか。「～から。」に続くように、――線④よりも前の文章中から二十字程度で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

用紙ヨコ　上　こちらを上にしてください

令和5年度　特選コース

第1回　中学校入学試験問題　〔国語〕　解答用紙　（2月1日午前）

注意事項

・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9

評価点

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一　10　9　8　7　6　5　4　3　2　1

二　八　七　六　五　四　三　D　B　二　2　1　一

三　七　六　五　四　C　B　A　三　二　オ　エ　ウ　イ　ア　一

四　五　四　三　二　一

一

1	土産	6	カイケツ
2	景色	7	カタン
3	徒労	8	メイカク
4	類似	9	スナオ
5	快（い）い	10	ツ（く）く

二

問一

問二　1 最初 ～ 最後　2

問三　B　D

問四

問五

問六

問七

三

問一　10

こと。

問二　ア　イ　ウ　エ　オ

問三　10

問四　A　B　C

問五　50　〈40〉　30　20　10

問六

問七

問八　40　〈30〉　20　10

四

問一

問二

問三

問四

問五　最初 ～ 最後 から。

問六

問七